

人吉・球磨地方への人道爆撃と伝単 その2

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 高谷 和生

1 紙の爆弾「伝単」とは

- 伝単(でんたん)とは「戦時において敵国の民間人、兵士の戦意喪失を目的として配布する宣伝謀略用の印刷物(ビラ)。その語源は物事を伝える紙片という意味の中国語」である。情報戦・心理戦でのプロパガンダリーフレットと言える。
- 「第二次世界大戦では、各国とも数千万枚とも数億枚ともいわれる伝単を印刷し、飛行機を用いて広域に散布」している。「日本上空の制空権を握ったアメリカ軍は、45年5月以降連日B-29爆撃機等で、軍閥や政府への批判、日本軍の窮状等の大量の宣伝ビラを散布した。これを拾った者は憲兵や警察へ届けることになっていたが、日本の民衆心理に効果をあげたという。特に空襲の目標となる都市への「事前警告ビラ」は、確実な予告ビラであり、リアリティに富み、日本国民の戦意を急激に低下させたとされる。

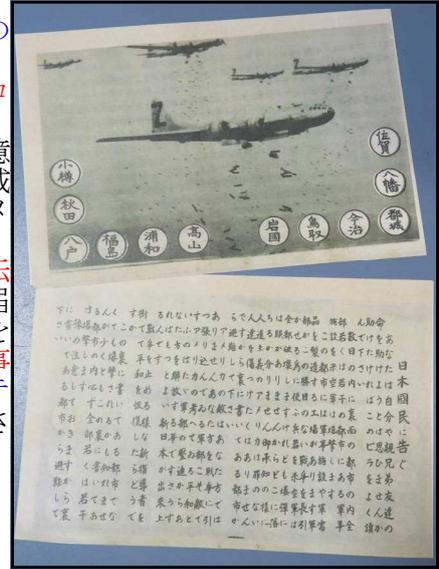


写真1 日本本土に投下された「伝単・日本国民に告ぐ 第1回投下資料(2106番)」 高谷和生所蔵

2 県内各地に投下された太平洋戦争末期の「伝単」

- 県内では、これまでに太平洋戦争末期において、熊本市3種と天草市2種での「伝単5種類」が確認されている。また、玉名市・菊池市でも投下証言が聴取されている。詳細は高谷報告「熊本に投下された紙の爆弾“伝単”」を参照
- 昭和二十年八月十二日熊本日日新聞に「熊本市に紙の爆弾 傳単の内容を喋れば敵罰 敵の思想謀略」の記事が掲載される。熊本市内での伝単投下を、8月10日「第2回熊本大空襲」当日が「初投下」とであると報じている。
- 「米国公文書館所蔵 National Archive RG496, Entry441, Box2714」によると、熊本市への投下は8月9日「137-J-1」が25,000枚、「152-J-1」が75,000枚、翌8月10日「152-J-1」が85,000枚と215,000枚が記録



写真2 熊本で実際に投下された「伝単 二種」 両資料ともに右側が「現物」、左側が「複写」である。
 上段①「無条件降伏の意義」伝単 下段②「ポツダム宣言」伝単 熊日新聞社新聞博物館所蔵
 上段は、「無条件降伏の意義」伝単(137-J-1)、横15cm×縦10cm、二色印刷。日本国民に向けての「長びく戦争の無意味さを伝え、日本国民の滅亡を意味する」と記している。
 下段は、「ポツダム宣言」伝単(152-J-1)、横20cm×縦12.5cm。ポツダム宣言13項目を解説し、「合衆国等の各政府が、日本に対して布告した合同最後通牒の要旨」と記されている。また、手書きで「本書ハ昭和二十年八月六・七日頃ヨリ敵機ヨリ投下シタルモノナリ」「廣島ハ八月五日 長崎ハ八月八日爆弾投下」と添え書きされている。

(3) 中国軍による爆撃、航路

『特高外事月報』により、中国軍爆撃機の航路を示す。

- ①中国軍機進入から二手に分かれるまで：韋北郡水俣町、佐敷町、日奈久町⇒球磨川下流から上流方面に飛行⇒下松球麻村（ここから伝単散布開始）⇒球磨郡人吉町（ここで中国機は二手に分かれる）
- ②二手に分かれてから再合流するまで（中国軍機 A）：人吉町川村、山江村、四浦、黒肥地村、湯前町、水上村⇒宮崎県西臼杵郡椎葉村
- ③二手に分かれてから再合流するまで（中国軍機 B）：人吉町⇒藍田村⇒宮崎県小林町
- ④再合流してから九州離脱まで：宮崎県延岡市到着までに合流⇒太平洋岸に出て海上で旋回⇒延岡市富岡町⇒熊本県人吉町⇒球磨川上流から下流方面に飛行⇒甕島方面から九州離脱

資料2 中国軍機爆撃航路表 小谷怜央氏論考「初期本土空襲から見る日本の防空体制における問題と限界」より

(4) 中国軍爆撃機

- 本地に伝単を投下したのは、「馬丁式重轟炸機（馬丁はマーチンの音訳）」である。
- マーチン重爆撃機 B-10 (Martin B-10) は、アメリカのマーティン社が開発し、アメリカ陸軍航空軍などで運用された爆撃機。アメリカ陸軍航空軍が採用した、初の全金属製単葉爆撃機である。
- マーチン社の自主開発機として、1930年より開発が開始され、胴体内に爆弾槽を設けた全金属製の双発機で、当時としては斬新なスタイルだった。
- 諸元は、全長 13.63m、全幅 21.60m、エンジン R-1820-33 空冷 9気筒 775HP×2、最大速度 343KM/H、航続距離 1996KM、爆弾 1050KG、乗員 4名である。輸出型は社内名称で「139W型」と呼ばれた。
- 爆撃機からの投下手段は、45年米軍が行なった通称「伝単爆弾（T1弾等）」によるものではなく、爆弾倉を開放しての「手撒き」によるものと想定される。



写真3 B-10マーチン重爆撃機
著作権フリー素材より

3 人吉・球磨地方投下の「伝単」の概要

(1) 投下伝単の概要

- 人吉・球磨地方等に投下された伝単概要については、明治大学情報コミュニケーション学部助手の小谷怜央氏論考「初期本土空襲から見る日本の防空体制における問題と限界—1938年の九州への中国軍機来襲を中心に—」及び昭和十三年五月二十一日「怪飛行機、反戦ビラ撒ク」九州日日新聞等による。
- ビラ概要は、石堂清倫解題『外事警察概況』第4巻497頁に収録。「日本各政党人士に告げる 中華民国國民外交協会」を参照する。
- ここで投下された中国軍伝単は、資料4「日本人民に告ぐ」（パンフレット・冊子形式）、その他リーフレット形式の「日本農民大衆に告ぐ」、資料3「日本労働者諸君に告ぐ」、「日本工商業者に告ぐ」、「日本各政党人士に告ぐ」の5種類である。
- 但し、配布枚数は「20万枚」とも地元紙で記載されるが、詳細は調査中
- 小谷怜央氏からは、以下の指摘をいただいた。
当時、武漢国民政府に亡命していた鹿地亘は、回想録の『抗戦日記』45頁で、伝単散布に向けて「ビラ六種を用意せよ」と命令を受け、上記5種に加えて「教育文化界」向けの伝単を作成したことを言及。そのため、実際は教育文化界向けの内容が書かれた6種類目の伝単も散布されていたことも推測できる。
- また、散布された伝単の要旨は、小谷怜央氏によると「農民や労働者等、呼びかける対象に応じて内容は異なるが、軍閥の批判と打倒の呼びかけでおおむね一致している」との事である。
- さらに、五月二十二日の九州日日新聞紙面では、文意は「矯激なる反戦ビラ」と記載
- 「日本各政党人士に告ぐ」現物を確認中である。
鹿地亘資料調査刊行会編『日本人民反戦同盟資料集』第10巻497頁に掲載済み

発見場所	発見部数五月三十日現在
熊本県球磨郡湯前町外十三ヶ村	九三三
〃 葦北郡下松求麻村	二八
宮崎県延岡市	二
〃 東臼杵郡門川町外六ヶ町村	三六五
〃 西臼杵郡諸塚村外一町村	一〇二
〃 西諸縣群小林町外一村	五〇
〃 児湯郡美々町外一村	四〇
合計	一五二〇

(内務省警保局保安課編『特高外事月報』昭和十三年五月分(内務省警保局保安課, 1938年) 35頁より作成)

表1 中国軍機投下伝単「印刷物発見表」 小谷怜央氏論考
「初期本土空襲から見る日本の防空体制における問題と限界」より

(2) 現地での聞き取り調査

ア 源嶋由紀氏宅での証言聞き取り

- 聞き取り調査では、多良木町議久保田武治氏は令和6年3月27日に、多田氏・淵上氏・高谷は、3月31日に実施
- 故**源嶋芳治(げじま よしじ)**宅は、球磨郡多良木町黒肥地栖山(たらぎまちくろひじすやま)7406番地 ※新聞記事「須山」は誤字で、**正しくは「栖山」**標記
- 芳治氏は、昭和46年3月10日没
- 証言者「源嶋由紀氏・85歳」は、芳治氏の息子文男氏の妻
- 当時の栖山集落は、約40棟。半林半農の集落で、村中央には球磨川支流牛繰川が流れる。また、当時の本宅は解体され、旧井戸のあった所に、現家屋が建てられている。さらに、北西側に清流の井手もあり、朝の洗顔等は両所で行っていたと、言う。
- ただし、父親芳治からは、伝単収集の事は一切聞いていない。関係する資料等も残されていない。今回の調査で、伝単事柄を初めて知った。
- 芳治氏死後でご遺詠は分家に移り、写真類も残されていない。



写真4・5 源嶋氏宅でのご遺族「源嶋由紀さん」からの聞き取りの様子

写真6 源嶋氏宅からの北西方向の山地側の風景

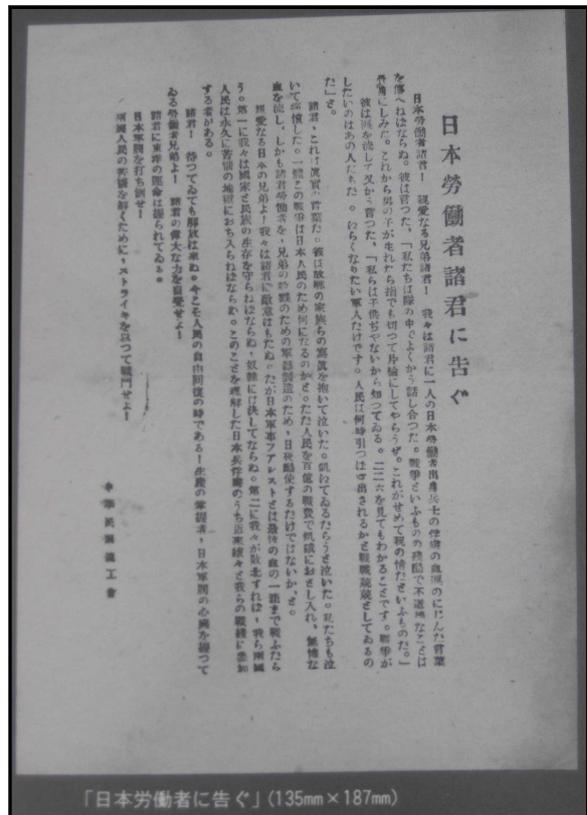
写真7 旧黒肥地村栖山集落の現在の様子

イ 故渋谷敦氏（人吉球磨地方の名士・郷土史家）の証言

- 地元新聞社である人吉新聞社「わたしを語る 球磨の夕映え」第5回に「球磨の空に中軍機の爆音」として、当時様子が掲載されている。○年○月○日に掲載
- 渋谷氏は、当時旧制人吉中学校3年生
- 「昭和13（1938）年5月20日、中間考査の勉強で朝4時、母に起こしてもらった私は、ふと遠い空に爆音を聞いた。当時、飛行機はまだ珍しい時代で、夜間の飛行など聞いたこともなかったことから、気になった。そのころまだ若かった母と二人顔を見合わせ、勉強そっちのけで、耳を澄ます。確かに爆音で、高高度を西から東へと飛んでゆく、やがて聞こえなくなって、しばらくすると、5月の夜明けの澄明な空に、再び爆音が聞こえて、今度は東から西の空へ長く尾を引いて消えた」と証言されている。

4 まとめ

- 昭和13（1938）年、日中戦争での徐州会戦での戦勝に浮かれ、交戦国航空機に侵入され、防空体制をとれずに、空襲警報さえ鳴らせなかった本空襲は、**日本空襲史の重要な事件**である。
- また、物理的被害も無かったことから、報道では「伝単投下の影響は一切ない」として「一笑に付し」て事件を軽視したことが、防空体制等の不十分さとなり、その後の**本格的な本土空襲につながった**のではなからうか。
- 人吉・球磨地方への中国軍機による「伝単」投下については、地元市民団体「人吉球磨の戦争遺跡を伝えるネットワーク」の多田喜一郎・淵上公典氏及び多良木町議久保田武治氏から、各種情報を提供いただいた。また、該当の市町村教育委員会文化財部局等からも、引き続き情報を収集している。
- 中国軍機による伝単投下については、当時多良木警察署の届けられた**「球磨郡多良木町（旧黒肥地村）栖山（すやま）集落」**周辺部を中心として、1938年の**「人道爆撃・伝単投下の記憶」**、当地での**「防空体制状況」**が、どの様に**「後世に継承されたか」**を、現在も調査中である。
- また、地元に残されていたとされる**「伝単」所在も確認中**である。
- さらに、航路にあたる芦北地方に、調査範囲を広げ証言収集を行なう予定である。

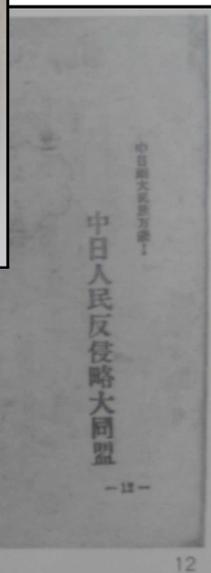
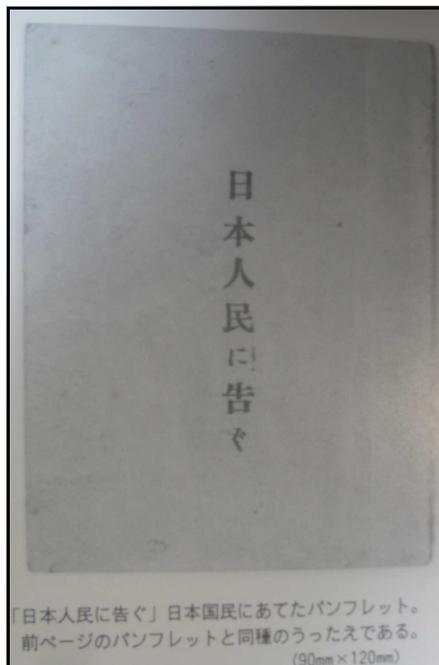
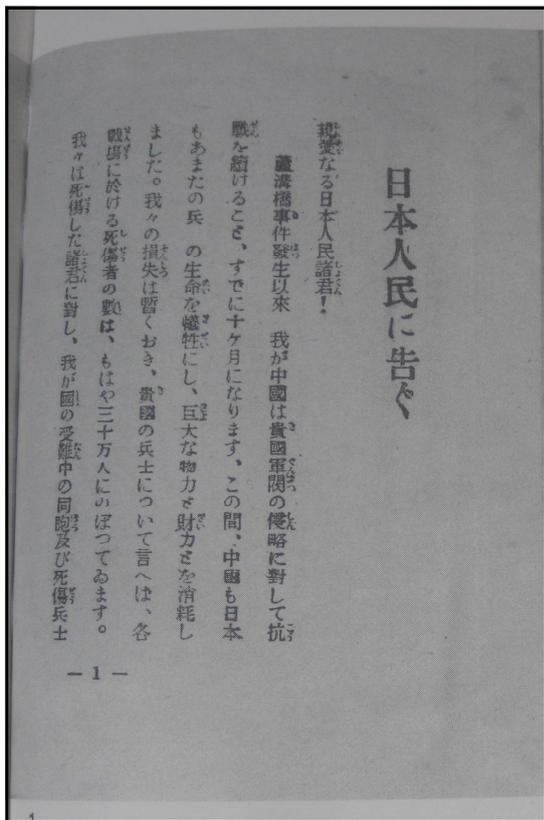


資料3 人吉球磨地方投下の伝単「日本労働者諸君に告ぐ」 平和博物館を創る会『紙の戦争・伝単一謀略ピラは語る』エミール社 1990年

連絡先



□ くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生
 個人携帯 090-1513-5528
 Eメール takayanagi912@yahoo.co.jp
 HP URL https://www.kumamoto-senseki.net/



資料4 人吉球磨地方投下のパンフレット形式の伝単
 「日本人民に告ぐ」 平和博物館を創る会『紙の戦争・伝単一謀略ピラは語る』エミール社 1990年より

